



1980年代を迎えて

理事
企画研究所長
研究管理部長
中谷 治夫

私は、近代化学工業が絶えざる現状否定と自己革新の工業であり、将来も同様に研究開発をベースとする技術革新によって繁栄・発展すると信じています。

研究開発とは知的な意味に於て、ハングリービジネスです。私達研究開発関係の従事者は、未来への予見性を具備し、且つ世界的に先端を行く理論によって武装することに飢えていなければなりません。研究管理者やリーダーは、アイデアのオリジナリティを尊重する気風と、開かれた研究開発マインドを持ち、経験側による積み上げ主義のみでなく、理想的な状態を想定し、それと現状とのギャップをいかに埋めて行くかと言う、いわゆる「システム思考」を生かして行かなければなりません。

研究開発の中で、熟慮された「企画・立案」は必要欠くべからざるものです。この研究企画はテーマの設定に最も重要なことです。今日程、企業の将来計画と中・長期の研究企画との、連動性と整合性を強く求められている時代はありません。私は総ての研究者に自らが会社の技術戦略を立案する為、優れた企画性を発揮されることを望みます。

私達は、革新的な化学技術が単に無機化学とか、有機化学とか、高分子化学とかの古典的ジャンルでは律しきれず、真の課題がそれらの境界領域にこそ存在することに注目しなければなりません。従って個々の研究者は、その専門分野の城に閉じこもることなく、むしろその専門分野を生かす為、自らの城を解放することです。又、これら境界領域の開拓の為、最新鋭の解析・評価装置を駆使すると同時に、化学ばかりでなく物理学ないし物理化学の思想と方法論を採用すべきでしょう。

言うまでもなく、仕事とは問題を解決する為の戦いです。現在が安定成長時代とは言え、社会構造・生活態様が複雑化し価値観が多様化した現在こそ、技術者にとってやり甲斐のある時代と、私は考えます。

この安定成長下に於ける企業の基盤強化と将来の展望が、研究開発力に依って左右されることを認識の原点とし、経営を変える技術・経営にインパクトを与える技術の創出が、企業に於ける技術陣の使命であることを念頭に置き、今後の仕事に立ち向かって行こうではありませんか。そうすれば1980年代は私達にとって輝かしい時代になるでしょう。